

トーバ、トーバ

私が一九八四年に赴任して以来も、サタールは常ならぬ病棟の入り口で、まるで警察官のようにじつと椅子に腰掛けて番をしていた。目付きの悪いやつだ、と初め私は思っていたが、パシユトウ語が分かるようになって世間話ができるようになる、屈託なく冗談を飛ばして明るい男だった。

指のなくなった手は、よく私の診療の役に立った。感覚障害で不注意にやけどを繰り返す、きき分けのない患者がいる場合、このサタールを呼びつけ、彼の指のない両手を見せる。

「用心してしないと、おまえもこんな手になるぞ。」

サタールは心得たもので、クナールなまりの強いパシユトウ語で、威嚇するように演技する。

「ドクター・サーブのおっしゃるのは本当だぞ。これを見る。おれも、もう少し早く治療を受けて、いうことを聞いていれば、こんなことにならなかつたものを……。アッラー（神よ）、トーバ、トーバ（くわばら、くわばら）。」

大抵の新患者はぎよつとして、よく分かりましたと、何度もうなずいたものだ。

長期滞在患者が増えてきて病棟で不穏な動きがあるときは、彼がいち早く察知して知らせてくれる。スタッフの怠慢もつつ抜けで、病棟の様子が手に取るように分かる。目立たぬが貴重な存在だった。

しかし、彼も自分の習性と信念から、イスラム教徒としての節を貫いていた。パシユトウンとしての誇りを捨てなかつた。口論のときなどは、人間ばなれした犍猛な顔つきに変わる。あるときは、食事の改善をめぐる入院患者のハンガー・ストライキがあった。またある時は、パキスタン患者とアフガン患者との対立が起きたりした。そんなとき、「お前もムサルマンだから加われ」という誘いに、眼をむいて怒って言った。

「ここが嫌なら他に行きやいい。『ムサルマンだから』なんて言葉は俺は信じねえ。おめえたちの事でドクター・サーブが居なくなりやどうするんだ。俺はそのムサルマンとやらに騙されて来たのさ。それに、パキスタンもアフガニスタンもあるものか。ジュザームはジュザームだ。患者はちゃんと治療を受けてりやいいんだ。」

全く彼は実直なイスラム教徒であり、パシユトウンであった。

男女の不祥事にも厳しかった。ある時、夜間に女性のトイレに潜んでいた男子患者が発見されてつかまった時などは、皆で犯人を捕らえ、顔に墨を塗りつけて追放したことがあった。

「パシユトウンの習慣なのか」と尋くと、「とんでもない。村ではこれくらいでは収まりませんや。鉄砲でぶち殺して終わりでき。」

